

■短報

上顎に発生した犬の アミロイド産生性歯原性腫瘍の2症例

Amyloid-producing Odontogenic Tumor in the Maxilla of Two Dogs

近澤征史朗¹⁾ 富永 牧子¹⁾ 檜森絵美子¹⁾ 平山 和子²⁾
谷山 弘行²⁾ 廉澤 剛¹⁾

Seishiro CHIKAZAWA¹⁾, Makiko TOMINAGA¹⁾, Emiko HIMORI¹⁾, Kazuko HIRAYAMA²⁾, Hiroyuki TANIYAMA²⁾ and Tsuyoshi KADOSAWA¹⁾

¹⁾Laboratory of Veterinary Clinical Oncology, Faculty of Small Animal Clinical Sciences, ²⁾Veterinary Pathology, Graduate School of Veterinary Medicine, Rakuno Gakuen University, 582 Bunkyo-dai-Midorimachi, Ebetsu, Hokkaido 069-8501, Japan

SUMMARY: Two Shih-Tzu dogs were diagnosed as amyloid-producing odontogenic tumor in the maxilla. We concluded the surgical excision difficult, because of their anatomical location. So we treated them with radiotherapy and surgical reduction, but the size of the tumors increased, and caused a decline of quality-of-life. Each of them died after 12 and 16 months from the first medical examination. Amyloid-producing odontogenic tumor is classified as a benign tumor, but its local infiltration is extreme, and showed an aggressive behavior.

Key words: amyloid-producing odontogenic tumor, Shih-Tzu, maxilla

要約：シーズー2症例の上顎に発生したアミロイド産生性歯原性腫瘍を診断した。解剖学的に根治的外科的切除が難しく、放射線療法や減容積処置などを行ったが、腫瘍は増大し著しいQOLの低下を招き、初診後12ヶ月および16ヶ月で死亡した。アミロイド産生性歯原性腫瘍は良性に分類される腫瘍であるが、局所浸潤性が強く非常に攻撃的な挙動を示した。

キーワード：アミロイド産生性歯原性腫瘍，シーズー，上顎

Jpn. J. Vet. Anesth. Surg. 40(2): 31-33, 2009.

はじめに

アミロイド産生性歯原性腫瘍は細胞間に多量のアミロイドを産生する上皮性歯原性腫瘍である¹⁾。本腫瘍は犬や猫で比較的稀に発生し、骨破壊は示すが遠隔転移を起こさず病理学的には良性腫瘍に分類される¹⁾。しかし、その生物学的挙動には不明な点が多く、本腫瘍に関する報告も乏しい。今回、シーズー犬に発生したアミロイド産生性歯原性腫瘍の2症例を経験したのでそ

の概要を報告する。

症例1

シーズー、11歳7ヶ月齢、未去勢雄、体重6.7 kgで、約7ヶ月前に左上顎歯肉の腫脹を主訴に近医を受診した。組織生検によってエプーリスと診断され経過観察を行っていたが、急速に増大してきたため精査および治療目的で酪農学園大学附属動物病院を紹介され、来院した。

本院初診時の身体検査では左上顎犬歯から前臼歯にかけて直径約4 cmの歯肉腫瘍を認めた(図1)。CT検査では病巣における激しい骨増生像、および病巣の眼窩への浸潤に伴う左眼球の変位を認めた。病巣の病理組織学的検査を行っ

¹⁾ 酪農学園大学大学院獣医学研究科伴侶動物医療獣医臨床腫瘍学研究室 (〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地)

²⁾ 同 病理



図1. 初診時外観と口腔内病変の肉眼所見

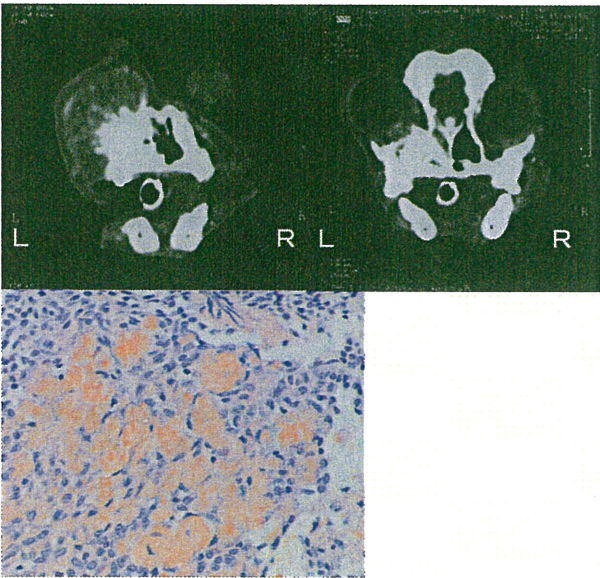


図2. 頭部CT像及び病巣部の病理組織像 (Congo red染色)

たところ、アミロイド産生性歯原性腫瘍と診断され、細胞間にCongo red陽性の好酸性無構造物質の沈着を認めた (図2)。

腫瘍が眼窩および脳に近接する口蓋骨に進展していることから、外科的治療は困難と判断し、放射線療法 (条件: 320 kV 12 mA, 1回線量6 Gy, 週2回, 計6回照射) を実施した。放射線照射による腫瘍サイズの明らかな減少は認められなかった。放射線療法終了後4ヶ月で腫瘍は増大傾向に転じ全身状態の悪化を認めたため、外科的な減容積処置を行った。減容積処置により全身状態は改善したが、処置後2ヶ月目に再び腫瘍が増大した。CT検査を実施したところ、腫瘍内部に液体貯留を認めた (図3)。ド

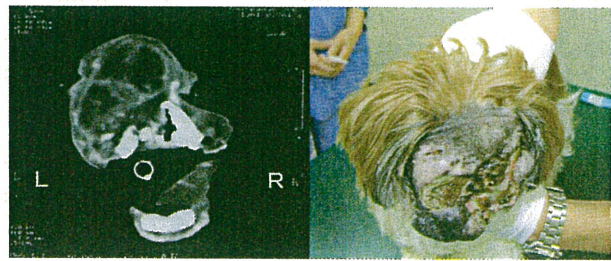


図3. 頭部CT像と外観

腫瘍組織内部の液体貯留と腫瘍の著しい増大による顔貌の変化が認められる

レーンの留置、放射線追加照射およびカルボプラチンの腫瘍内注射などを行ったが奏効せず、徐々に全身状態が悪化して初診から12ヶ月目に死亡した。

症例2

シーザー、9歳2ヶ月齢、未去勢雄、体重5.8 kgで、1週間前に右頬部の腫脹・硬化を主訴に近医を受診した。レントゲン検査にて右上顎腫脹部に軽度の石灰化と骨膜反応を認めた。さらなる精査および治療を目的に本院を紹介され、来院した。

本院初診時は全身状態には問題なく、一般身体検査で右上顎犬歯から第4前臼歯にかけて直径約2 cmの歯肉腫瘍を認めた (図4)。CT検査にて病巣における激しい骨増生像および病巣の眼窩への浸潤に伴う右眼球の変位を認めた (図5)。腫瘍組織の病理組織学的検査結果はアミロイド産生性歯原性腫瘍であり、間質にCongo red 陽性の好酸性無構造物の沈着が特徴的であった (図5)。

腫瘍は眼窩に進展し脳に近接していたため根治的な外科的治療は困難と判断し放射線療法 (条件: 320 kV, 12 mA, 1回線量4 Gy, 週2回, 計10回照射) を実施した。放射線療法の実施前後で腫瘍サイズの著変は認められなかった。放射線療法終了後約11ヶ月間は腫瘍の顕著な変化がなかったが、その後腫瘍は増大し内部に無菌性の液体貯留を認めた (図6)。放射線療法の追加照射を行ったが効果は認められず、徐々に食欲不振など全身状態は悪化した (図6)。外科的な減容積処置や経鼻カテーテルによる栄養管理などの支持療法を行ったが、初診から16ヶ月目に死亡した。



図4. 初診時外観と口腔内病変の肉眼所見



図6. 頭部CT像と外観
腫瘍内部の液体貯留と腫瘍の著しい増大が認められる

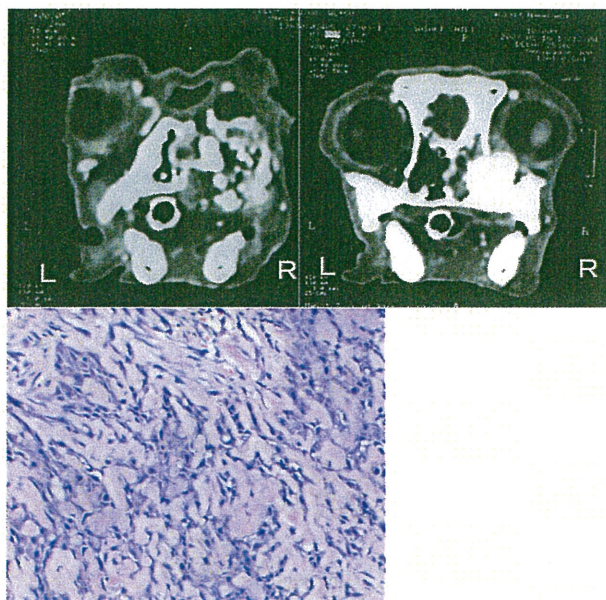


図5. 頭部CT像及び病理組織像 (HE染色)

考 察

アミロイド産生性歯原性腫瘍は歯を形成する上皮系細胞由来の腫瘍の一つである。上皮系歯原性腫瘍は、2003年のWHO分類においてエナメル上皮腫、棘細胞性エプーリス、アミロイド産生性歯原性腫瘍の3種類に分類されたが¹⁾、アミロイド産生性歯原性腫瘍の生物学的挙動に関する報告は十分にはない。アミロイド産生性歯原性腫瘍は病理学的には良性腫瘍に分類されているが、今回の2症例では、局所浸潤性が強く罹患動物に著しいQOLの低下を招いており、臨床的に悪性の生物学的挙動を示す場合があることが明らかとなった。また、今回の報告では2症例の品種がともにシーズーであり、過去に報告

されている2症例^{2,3)}も同犬種であることから、シーズーは好発品種と考えられた。今回の報告では本腫瘍発生時の年齢が11歳および9歳齢であり、過去の1報告と概ね同年齢であるが³⁾、9ヶ月齢のシーズーの下顎に発生したとの報告もあることから¹⁾、若齢犬における本腫瘍の発生にも留意する必要があると考えられる。

治療に関しては、解剖学的に摘出困難と判断し放射線治療を行ったが、腫瘍の増殖を一時的に抑制した可能性はあるものの、縮小はほとんど認められなかった。我々の用いた放射線はオルソボルテージX線であることから、今後メガボルテージX線についての検討が望まれる。しかしながら、本腫瘍は良性腫瘍であり、外科的切除が可能であれば良好な予後が得られると予想される。従って本腫瘍に対しては早期に正確な診断を下し、積極的な外科的切除を行う必要があるが、また今回のように眼窩や口蓋骨に及ぶ場合には容易ではないが、CT画像を基にして綿密な手術計画を立てて病巣を切除する試みが必要であると思われた。

文 献

- 1) Head, K.W. (2003): Tumors of the Alimentary System of Domestic Animals, Second Series Volume X, pp.46-51. Armed Forces Institute of Pathology in cooperation with the American Registry of Pathology and The World Health Organization collaborating Center for Worldwide Reference on Comparative Oncology, Washinton, DC.
- 2) Kuwamura, M., Kanehara, T., Yamate, J., Shimada, T. and Kotani, T. (2000): Amyloid-producing odontogenic tumor in a shih-tzu dog. *J. Vet. Med. Sci.* **62**: 655-657.
- 3) Tsai, Y.C., Jeng, C.R., Zhuo, Y.C., Tsai, Y.C., Liu, C.H. and Pang, V.F. (2007): Amyloid-producing odontogenic tumor and its immunohistochemical characterization in a shih tzu dog. *Vet. Pathol.* **44**: 233-236.